

心臓弁膜症の手術に合併症のリスクはある？

磯部 心臓弁膜症の手術で、合併症のリスクがあるというのはいくらも聞きますが、実際にはどうなのでしょうか？

七里 若い方でも肺の病気があって、開胸手術が難しいというケースがあります。その場合はカテーテル治療を推奨しています。また、がん患者さんで、その後の手術を優先したいという場合は、カテーテル治療を選ぶことで、合併症のリスクを減らすことができます。大切なことは、患者さん一人ひとりの状況に合わせて治療計画を立てるということです。特に高齢者の方は、医師と患者さんで十分に話し合ってください。本人が希望する治療を進めることが、最近の世界的な流れになっています。英語で「シェアード・ディシジョン・メイキング」といいます。例えば、本日たたび話題に上がる「大動脈弁狭窄症」は、生死に関わる疾患です。で、医療側としては基本的に治療をすすめます。ただ、ご本人が手術を希望しないのであれば、その意志は最大限尊重するものとしています。

磯部 高齢者の中には、認知機能が衰えている方もいらっしゃると思います。そういうケースへの対応はとされていますか？

七里 認知機能の課題はかなり大きくなっている場合は、ご家族とよく相談することが鉄則になります。残念ながら、心臓弁膜症の手術によって認知症が改善することはありませんが、そのあたりも含めて、治療を行うかの話し合いをご家族とよく行っています。一方



で、高齢者の中には、「自分はもうなつてもいいんだ」という方も少なからずいらっしゃいます。つまり、お子さんは治療に積極的、ご本人は消極的というパターンになるのですが、心臓弁膜症のカテーテル治療に関しては、身体への負担が少ないこともあって、術後の回復も早く、「やっとなつた」というお声をいただくことも多いですね。質問に戻りますが、私個人としては、認知機能に課題がある方も積極的に治療を受けて、家族との大切な時間を少しでも長く持てるようにしてほしいと思っています。

「生体弁の寿命は10年と言われたが？」

磯部 次は、大動脈弁狭窄症で生体弁の置換手術を受けた方から、「弁の寿命は10年と言われたが、その後はどうなるのか」という質問です。

七里 シンタの生体組織由来の生体弁の耐久年数は10年と言われていますが、すべての生体弁が10年で使えなくなるわけではありません。10年で取り替える必要があるのが約5%、15年で約10%というのが最近の報告だと考えていいと思います。中には2〜3年で取り替える方もいれば、20年経つても大丈夫な方もいます。若い方は、運動量が多いので、生体弁が壊れやすい傾向があるものも注意すべき点です。20代の方と70代の方で、生活習慣は違いますよね。そういう意味では、大動脈弁狭窄症の治療が必要であれば、50代後半くらい以後であれば生体弁を選ぶのがリーズアップルではないかと考えます。

磯部 続いての質問は、「心房細動」という診断を受けて、抗凝固剤を飲んでいるのですが、心臓弁膜症のリスクはありますか？「このことですが……」

七里 心房細動は、不整脈のひとつですが、心臓弁膜症の中ですと、僧帽弁閉鎖不全症と深い関係があります。手術のタイミングを考えると、心房細動の兆候が出てきたかどうかを検討要素になります。それは心臓に負担がかかっているサインなので、(僧帽弁閉鎖不全症の)手術をしましょう



という根拠にもなります。また、心房細動が起こると血栓ができやすくなり、脳梗塞のリスクも高まります。そのため、血液をサラサラにする抗凝固剤を一生飲み続けることは避けられないと思います。

磯部 続いての質問は、心臓弁膜症の手術後の食生活についてです。

七里 繰り返しになりますが、血圧を下げる食事を心がけていただくことになります。塩分控えめ、カロリーも控えめ……という出汁を上手に使うような食事ですね。また、心不全の傾向があると診断を受けている方は、体重管理も重要です。体重が増えるだけで、心臓の負担が大きくなり、疾患のリスクが高まります。適度な運動と健康な食生活を続けるのが大切ということですね。

磯部 「大動脈弁閉鎖不全症」の兆候があるが、まだ手術をするほどではないと言われている方がいます。アドバイスはありますか？

七里 すべての心臓弁膜症に共通するのですが、症状には「程度」があります。重症であれば、手術をする必要はありますが、定期的に診断をして医師と相談しながら、「今だ」というタイミングで治療をするのがベストです。

今回のようなイベントが一般市民への啓発活動に

磯部 今後、一般の方が診察を受ける機会を増やすにはどうすればいいとお考えですか？

七里 これは日本だけでなく、幅広い大きな問題なんです。ショッピングモールのような場所で、診察を無料で受けられる機会を設けるのも一案だと思います。診断の機会が増えれば、心臓弁膜症の早期発見につながります。そういう意味では、今回のようなイベントが一般市民への啓発活動として本当に大切だと思います。ぜひ皆さんも、ご家族に診察を定期的に受けるように伝えてください。